

	感じる・ 気付く力	うごく力	考える力	やみぬく力	人とかか わる力
12 パン屋さんごっこ いらっしゃいませ!はいどうぞ			●		●
13 見て!力持ちが,片付けます!		●			●
14 キノコって おいしいね!	●		●		●
15 お水,冷たいね	●		●		●
16 みんな大好き 家族だよ!	●		●		●
17 プール楽しいね		●		●	●
18 虹が 出とるよ	●		●		●
19 鳴子作ったよ!踊ったよ!	●		●		●

事例 12

2歳0か月
(2歳クラス)

パン屋さんごっこ
いらっしゃいませ！はいどうぞ

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかかわる力

【活動の様子】

パンの絵本を読んでいると、パクパク食べる仕草をしているので、ままごとコーナーに、新聞紙を丸めて紙でくるんだパンを置いてみる。

パンを見付けると、子供たち5人が「して」とままごと用のエプロンを持って来るので、「パン屋さんになるの？エプロン付けるんだね」と言葉を添える。

子供たちは、エプロンを付けてもらおうと、パン屋さんの気分になって、「いらっしゃいませ」と言いながら、パンを並べ始める。

お客さんの子供たち2人は、並べられるパンをじっと見ている。保育者は、「おいしいパンを買いに行こうね」とカゴを渡す。

保育者も、お客さんの子供たちと一緒に買いに行き、「これは、何パンですか？」と尋ねてみる。

パン屋さんのA児（3歳0か月）とB児（3歳2か月）は「クリームパンですよ」、「はい。ウインナーのパンもあげる」、「メロンパンもあるよ」と保育者のカゴに入れ、カゴはすぐにパンで一杯になる。

C児（2歳0か月）が、パン屋さんごっこの様子をじっと見ているので「おいしそうなおパンがあるよ。一緒に買いに行く？」と声をかけると、手をつないでくる。

「パンがいっぱいあるね。どのパンがいいかな」と一緒に見ていると、C児はパンを一つ選ぶ。保育者が「パン屋さん、これは何パンですか？」と尋ねると、パン屋さんのA児は「んっとね、クリームパン」と答える。「Cくん、クリームパンだっ。クリームパンにする？」とC児の顔を見ると、頷いたように見える。

保育者とA児が、「クリームパンください」、「どうぞ」、「ありがとう」とやりとりをしていると、C児も頭を下げて「（ありが）と」と伝え、モグモグと食べるまねをする。

パン屋さんのA児は、そのC児の姿を見て笑顔になる。

【遊びの中で育まれている力】

- 友だちのまねをしたり、刺激をし合ったりしながら、遊びを楽しむ。【人とかかわる力】

見立てや料理の内容が具体的になる年齢なので、パンを用意して、イメージを広げていきたい。

子供たちの「〇〇のつもり」をつなげていきたい。

「〇〇のつもり」になることを助けるエプロン・カゴ・トングを準備することで、「パンを買いに行くつもり」、「パンを売るつもり」が楽しめるようにしてみよう。

- A児とB児は、クリームパン、メロンパンなど知っているパンの名称を言いながら、遊びを楽しむためのイメージを膨らませる。【考える力】

C児は、遊びをそばでじっと見ている。一緒に遊びたいのではないかと思い、誘ってみることにした。

- A児、C児もパン屋さんごっこのイメージを共有して、やりとりを楽しむ【人とかかわる力】【考える力】

手をつないできたので、やっぱり遊びたかったのだなという気持ちを汲み取り、一緒に楽しもう。



この遊びの中での学びを支えたもの

【いつものコーナーから遊びを発展】

ままごとコーナーは、子供たちに安心感をもたらすので、常に設置している。子供たちが好きな絵本を見ながら、パンを食べるまねをして楽しんでいたので、ままごとコーナーにパンを用意した。ちょっとした変化に子供たちは喜び、それぞれにイメージが広がり「パン屋さんになったつもり」、「お客さんになったつもり」で遊びが広がった。

【保育者の意味付け（価値付け）による遊びの広がり】

保育者がモデルになり一緒に遊びながら、子供たちが発想・発信したことに耳を傾け返していった。子供たちの「〇〇のつもり」のイメージを膨らませながら、一人一人の「つもり」をつなげていくことで、遊びが広がっていった。

先生方へ…



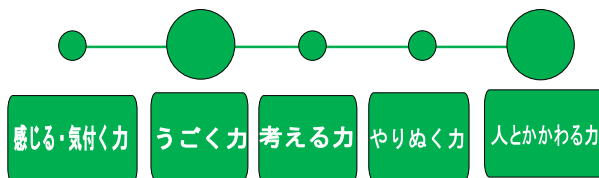
2歳児になると、普段の生活への興味から、自分が日頃体験していることをごっこ遊びで展開していきます。保育者が、いつものままごとコーナーにパンらしきものを置いておくだけで、子供たちのイメージが、家の中からパン屋さんの世界へと広がっていきました。子供の発信・発想したことに耳を傾け、子供たちが遊びの面白さを発展させていくことができるように、エプロン・カゴ・トングを用意するなど、環境を整えていくことが大切です。

この事例では、単にパンと表現していたものに「これ、何パンですか？」と声をかけることで、子供たちは、自分たちの知っている「クリームパン」、「メロンパン」と命名して遊ぶようになりました。また「クリームパンがほしいんだって」とC児の思いを仲立ちすることで、パン屋さん・お客さんの役割で、イメージを共有して遊ぶようになりました。このように、2歳児の「見立て、つもり遊び」から、「ごっこ遊び」が生まれてくる瞬間を、保育者がサポートすることが、豊かな発想を広げながら遊ぶ姿になり、本当のパン屋さんに行った時に現実のものと結び付き、社会事象へ目が向いていくようになるのです。

事例 13

2歳2か月
(2歳クラス)

見て！力持ちが、片付けます！



【活動の様子】

牛乳パックで作った箱積み木で遊んでいたA児（3歳0か月）は、ふらつきながら大きな箱積み木を持ち上げて、保育者の方を見る。

思わず「Aくんすごいね。力持ちだね」と声をかけると、A児は嬉しそうに運んで行く。

それを見ていたB児（3歳2か月）は、片付けていたブロックを放って、きょろきょろ見渡し、大きい箱積み木を持ち、「見て。Bくんも力持ちよ」と言う。

「ほんとだ。Bくんも大きいのが持てるんだね。力持ちだね」と声をかけると「待ってました」とばかりに張り切って運んで行く。

A児とB児は「力持ち、力持ち」と言いながら、箱積み木を片付ける。

C児（2歳2か月）は、二人の様子を見ていて、二人が片付けた箱積み木を持ち上げ「せんせー」と保育者を呼ぶ。

「わあ！Cちゃんも力持ちだね。積み木のお家まで持って行けるかな？」と声をかける。C児が、バランスを崩しそうになったので、見えないところをそっと支えながら「力持ち、力持ち」と一緒に片付ける。

保育者から「きれいになったね」と声をかけられると、C児は、満足そうな表情になる。

【遊びの中で育まれている力】

- A児は、保育者に声をかけられて、片付ける。
【うごく力】

大きな箱積み木を持つことができ嬉しいという気持ちを汲み取り、共感していく。

- A児と同じように認めてほしい気持ちで行動する。
【うごく力】【人とかかわる力】

子供たちにとっては、片付けにも遊びの要素がある。「力持ち」という言葉のリズムの面白さから、箱積み木を運ぶという片付けも面白くなると考えた。

2人の姿を見てC児は「面白そう」、「やってみよう」と思ったようだ。C児にも認める声かけをしてみよう。

見えないところを支えて手伝うことで、満足感を味わってほしい。

- 保育者のさりげない手助けにより、C児は達成感を味わう。
【人とかかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【保育者の関わり】

チャレンジ精神旺盛で、何でもできるという自信を持つようになる時期には、保育者が意識して、子供の気持ちを汲み取ったり、共感したり、言葉に置き換えたりするなどの関わりや、友だちと同じように自分も認めてほしいという思いをしっかりと受け止める関わりをすることが大切である。

【心地よい言葉のリズム】

言葉の意味はよく分かっていなくても、言葉の響きが気に入りにくさむことで、子供たちは、他者と共感する心地よさを感じている。このことが、「一緒に楽しい」という人とかかわる力の育ちにつながっていく。

【身体的な発達】

2歳になると、歩行が安定し、重いものを持って歩くなど、バランスを取りながら歩くことを喜ぶようになる。遊びの中で自分の体を動かすことを繰り返すことは、動く力の基盤になっていく。

先生方へ…



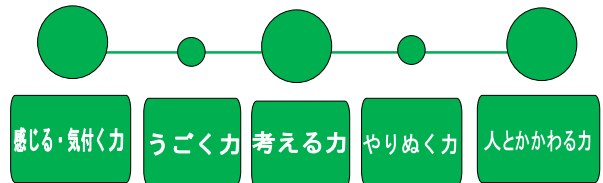
基本的な生活習慣の定着で大切なことは、遊びの片付けです。やりたいこととやりたくないことがはっきりしてくる2歳のこの時期に、気持ちを切り替え、楽しんで片付けをすることができるように、保育者は様々な工夫をしたいものです。発達段階によっては、片付けが遊びの一つになります。分類して写真を貼って示すなど、分かりやすく配置するとともに、保育者と一緒にやりとりをしながら楽しく片付けることが大切です。

この事例では、A児が保育者から「〇〇ちゃんすごいね。力持ちだね」と声をかけてもらったことが嬉しくて、片付けることが心地よくなっていきました。それを見ていたB児も、A児と同じように先生に認めてもらいたくて、大きな積み木を探して片付け始めます。保育者が、A児と同じように見てほしい、認めてほしいという、期待に添った関わりをすることが、結果的には自ら進んで片付けるという姿につながっていったのです。また、「きれいになったね」と言葉をかけることで、片付けた後の気持ちよさや、片付けの大切さにも気付いていったのです。保育者との信頼感のもと、友だちと共感・同調する関係の中で、自分で決め、決めたことを実行することを繰り返し経験することは、気持ちを立て直したり、やりたいことに向かって意欲的に取り組んだりする力へとつながっていきます。

事例 14

2歳8か月
(2歳クラス)

キノコって おいしいね!



【活動の様子】

秋を迎える頃、子供たちは、少しずつ長い距離を散歩できるようになる。空を見上げ、たくさんのトンボが飛んでいることに気づき、「トンボのメガネ」を一人が口ずさむと、自然に大合唱になる。

芝生の中に生えたキノコを見つけた保育者が、「キノコだよ」と教えると、A児（2歳8か月）は、「これ、キノコ？」と不思議そうに見つめ、「きききキノコ、こうよね」と、身振りでもキノコのカサのポーズをする。保育者が笑顔で応えると、得意そうな顔でキノコの歌を意気揚々と歌い始め、またまた大合唱となる。

園舎が見えたところで、「おなかすいたね」と一人が言うと、「おなかすいたね」と全員が繰り返す。「給食早く食べたいね」、「今日の給食何かね?」と、今までになく食への関心を示す姿が見られる。

待ちわびた給食の味は格別のように、「おいしいね」と口々に言い合っている。スープの中に、A児がシメジを見付け、「あっ! きききキノコだ!!」、「おいしー」と言うと、全員スープに手が伸び、あっという間に食べてしまう。

A児の「先生、給食って誰が作るん?」という言葉に、「給食室にいる〇〇先生よ」と保育者が答える。すると、「ごはんは?」、「〇〇先生が炊いてくれるよ」、「牛乳は?」、「牛乳屋さんを持ってきてくれるよ」、「お茶は?」、「〇〇先生が沸かしてくれるよ」など、周りの子供も聞きたいことが膨らんでいく。

作る以外の炊く・沸かす・持ってくるの言葉の違いに気付いたのか、「人参は炊く?」、「キノコは炊く?」、「どうやって炊く?」、「人参は〇〇先生が切ったん?」と、具材にまで質問が及ぶ。

気が済むまで尋ねると、給食の先生がどんな先生か気になり始め、子供たちは給食室を覗きに行き、保育者と一緒に「おいしかったよ」と声をかける。

この日以降、保育者が食器を返しに行く時、「おいしかったよ」、「ごちそうさま」が言いたいと、一緒についてくるようになる。給食の先生に「またおいしいの作るね」と声をかけてもらおうと、子供たちは本当に嬉しそうな顔をする。

【遊びの中で育まれている力】

- 大好きな散歩で、いろいろなものを見つけて、嬉しい気持ちで一杯になる。
- 目の前をたくさんのトンボが飛び交う様子に心を奪われ、興味を持つ。

自然に生えているキノコを目の当たりにし、興味を持っている。子供の発見に共感したり、自然物の名前を知らせたりして、子供の興味・関心を広げていきたい。

- キノコが生えている形や色に不思議さを感じる。
【感じる・気付く力】
- みんなで一緒に歌う楽しさを感じる。

- シメジがスープの中に入っているのを見付け、キノコを見た喜びを再び感じる。【感じる・気付く力】
- 今日見たキノコと同じキノコを食べたという嬉しさと美味しさを、口いっぱいを感じる。【感じる・気付く力】

キノコに遭遇したことで、食べる意欲が増している。食への関心が高まるように働きかけていきたい。

- 作ってくれた人にも関心が高まる
- 保育者の言葉から、炊く・沸かす・持ってくるの違いに興味を示す。
- 疑問に思うことを積極的に言葉にし、納得するまで尋ねる。【考える力】



- いつも美味しい給食を作ってくれる先生に、改めて会いたくなる。
- 保育者と一緒に食器を返しに行き、ありがとうの気持ちを、「おいしかった」、「ごちそうさま」と表現し伝える。【人とかかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【保育者との信頼関係の中で培われた安心感】

保育者の優しいまなざしに見守られた信頼感の中で、子供が確かめるように保育者を見た時、その笑顔は安心感を与え、子供の様々な力の源になる。この安心感の中で、実際に目にしたものと記憶に残っていることが一致した喜びが、さらなる知りたい気持ちへとつながり、新しい発見をしたいという探究心が育まれていく。

【語彙力を培う保育者の関わり】

恵まれた自然環境の中で、生き物などを目の当たりにして興味深く観察し、発見した喜びは、次の興味・関心を生み出していく。その時、保育者の応答的な援助が、友だちの言葉に触発され、言葉で伝え合う力を育てていく。

【人との関わりを広げるコミュニケーション】

散歩でキノコに出合った子供の発信する言葉に耳を傾け、共感したことで、美味しいキノコスープを作った人に出会いたいという興味・関心が広がった。この保育者とのコミュニケーションが、人との関わりを広げる原動力になっている。

先生方へ…



身の周りの自然や散歩途中で出会う動植物の世界には、1, 2歳児にとって、不思議さや面白さを感じる発見の場がたくさんあり、「今日はどんなこと（もの）に出会うかな」という期待も生まれます。

事例では、散歩中、実際に見つけたトンボやキノコに驚き、感動し、その名前を知ったことが、今まで経験した歌や身体表現とつながり、子供たちはその楽しさを味わっています。また、タイミングよくその日の給食に

キノコが出され、ますます関心が高まってきました。そして、作ってくれた人を「確かめたい」、「会いたい」といった子供の思いを保育者が丁寧に受け止め、実際に願いを叶えたことが、さらに思いを巡らすことにつながっています。

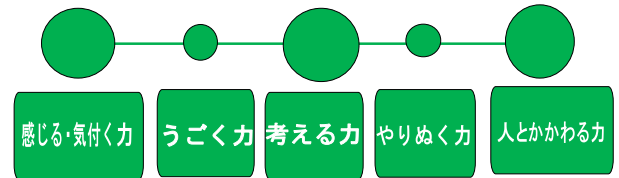
このように、子供の感じていることを受け止め共感したり、言葉に置き換え返したりすることが、大人との信頼関係を築き、大人へ自ら働きかけることにつながります。

この後、子供たちは、これまで以上に知識や体験を総動員し、興味や関心を持った事柄について楽しんで考えるようになっていくことでしょう。「なぜ」、「どうして」の言葉に耳を傾け、保育者が応答的に対応することが、子供たちの思いを次の学びにつなげるためのきっかけになっていきます。

事例 15

2歳10か月
(2歳クラス)

お水、冷たいね



【活動の様子】

園の周りには田んぼが多く、散歩道の横には側溝や川もある。5月には田んぼに水を引くため、側溝にかなりの水が流れ始める。

いつものお散歩コースに出かけていくと、さっそくタンポポを見つけて綿毛を飛ばして遊ぶ子供、お花の匂いをかいだり摘んだりしている子供、「カエルさんがいるよ」と嬉しそうに教えてくれる子供、思い思いに5月の自然を楽しんでいる。

A児は、側溝に泡を立てながら流れていく水が気になったのか、じっと水面を見つめている。

「いっぱいお水が流れてるね」と声をかけると、「前はお水なかったのに…」と、流れる水をじっと見ながら独り言のようにつぶやく。保育者は、「そうだね。前はお水なかったね」と言葉を返す。

「お水が気持ちよさそうだから、ちょっと触ってみようかな」と、保育者がかがんで水に触り「わ！冷たくて気持ちいいよ！」と声をかけると、A児は保育者の横で道に腹這いになって、水に手をつける。想像以上の冷たさと流れる水の勢いにびっくりしたのか、すぐに水から手を離れたが、今度はゆっくりと手を入れて、感触を確かめているようである。その後で、「うん、冷たくて気持ちいい」と答える。

A児が腹這いのまま顔を上げて「みんなー！、お水が冷たくて気持ちいいよ！」と友だちに声をかけると、一緒に散歩をしていた同じクラスの子供が近づいてきて、A児の横に並んで腹ばいになって、手を水に入れる。隣の子供同士で顔を見合わせ、「冷たいね」、「気持ちいいね」等と言葉を交わしながら、心ゆくまで水と親しんでいる。

【遊びの中で育まれている力】

- ・自然物を使って遊んだり、小動物を見付けたりするなど、季節の移ろいを諸感覚で感じる。【感じる・気付く力】

今までは水が流れていなかった側溝に、水が流れているのに気が付いたのかもしれない。今の状況を伝えることにより、変化への気付きを引き出してみたい。

- ・側溝を流れる水の量がこれまでと違うことが分かり、思いを言葉で表現する。【考える力】

流れる水に興味を持っているように見える。まず自分が水に触ってA児を誘い、新しい気付きを促してみよう。

- ・水の流れが速くなっていること、溝の深さ、腹這いになって夢中になっていることなどで体のバランスが崩れ、落ちることのないよう、子供のそばで見守り、安全には十分配慮する。

- ・水を触ってみたいという思いから、自分から腹這いになり、水の冷たさや流れを諸感覚（触覚）で感じる。【感じる・気付く力】
- ・発見したこと、思ったこと、感じたことを言葉で伝えて、友だちと体験を共有する。【人とかかわる力】



この遊びの中での学びを支えたもの

【豊かな自然環境と気づきを促す保育者の関わり】

園が豊かな自然環境に恵まれていること、そしてその自然環境から保育が子供の気づきを引き出す関わりをしていくことにより、子供たちが季節の移ろいや小さな変化に気付いていった。

【楽しさを共有できる友だちの存在】

水の冷たさや流れる水の感覚など、発見したことを自分だけの体験にとどめず、友だちと共有したいと思えたのは、一緒にいて楽しい友だちの存在があってこそである。

【保育者との信頼関係】

保育者との応答的關係、促しに即座に応じる関係は、一朝一夕にできるものではない。この信頼關係の基盤があることから、気づきの連鎖が起こっていった。

先生方へ…



いつもの散歩コースにも、小さな発見や偶然の出会いがあります。2歳児にとって、友だちと一緒に散歩は、自然物と触れ合ったり生き物を見付けたりして驚いたことを伝え合うなど、仲間がいることで楽しさが倍増します。

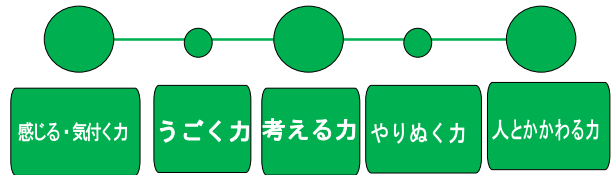
いつものコースだからこそ、いつもとは違う変化に気付くこともあります。A児は、側溝を流れる水を見て、「あれ、どうしたのだろう?」と立ち止まりました。安全に十分配慮しながら保育者がそれを見守り、気づきを支える言葉を返しました。A児は、「水の冷たさに気付いた感動を仲間と共有したい」という思いを受け止めてもらった安心感から、友だちにも声をかけることができました。

その後、保育者の行動に促され、友だちと腹這いになり自ら積極的に自然と関わり、2歳児なりの水の感覚を言葉にして互いに伝え合いながら共感し、コミュニケーションを楽しみました。友だちと発見や感動を共有する体験は、今後の協同的な遊びへとつながっていきます。

事例 16

2歳11か月
(2歳クラス)

みんな大好き 家族だよ！



【活動の様子】

2歳児クラスの中で、A児（2歳11か月）がスカートを手からかぶっている。ドレスの襟元のようにヒラヒラして動くのが、とても嬉しいようで、髪の毛を手で払うように、右手でかき上げている。もう1枚のスカートもはき、膝を合わせるようにしておしとやかに歩き、お姉さん、お母さんに変身している。

周りの子供もお気に入りのスカーフやスカートを身にまとい、みんなそれぞれの役になりきっている。表情も楽しそうで、ワクワク感一杯で、家族ごっこが始まる。

A児が、茶わんや皿を並べ、次に鍋のフタを取り、中を覗き込んで、「ごはんできたわよ」とみんなに言うと、B児が、「赤ちゃんが寝ているから、静かにね」と、すかさず言う。

家族のやりとりがリアルに描かれ、はにかんだ伏し目がちな視線が、大人になった気分を味わっていることを物語っている。

保育者が、「お父さん、お母さん、赤ちゃんよく寝ていますね」と言うと、満面の笑顔で2人とも「はい」と一言言う。嬉しそうに顔を見合わせて笑い合っている。リアル感が増した嬉しい気持ちが、全身から溢れている。

二人は寝ている赤ちゃん人形を見つめながら、お母さんと、お父さんになりきっている。

【遊びの中で育まれている力】

- いろいろなものを身に付けることで、憧れの大人になりきり、遊びを楽しむ。
- あこがれのスカートをはいて気持ちが高まる。
【感じる・気付く力】

大好きなお母さんのまねをして、家庭での出来事を再現しながら友だちと一緒に楽しんでいる。なりきって遊ぶことをさらに楽しんでほしい。様子を見守ってみよう。

- お母さん気分を味わっている。

- お父さん、お母さんの役割を意識しながら、会話を楽しむ。【考える力】【人とかかわる力】

様子を見守りながら、会話に耳を傾けてみることにしよう。

子供同士の遊びの様子を見守りつつ、言葉かけによって、想像力をより膨らませることができるように、援助してみよう。

リアル感のある会話により、楽しさをより感じている。大好きな家族の様子を日頃よく観察しており、模倣遊びの中で、役割になりきり、遊びを楽しんでいる。



この遊びの中での学びを支えたもの

【イメージが実現できる環境作り】

日々間近に観察している、大好きな家族のことを再現している様子を見守り、子供たちの発想を妨げないよう、身に付けるものや空間を構成するなどして、一人一人の見立てを大切にした環境構成を整えることが大切である。その中で、保育者の安定した関わりは欠かせない。

【一人一人の「見立て」や「ごっこ」をつなぐ保育者の援助】

子供たちが、見立て遊びやごっこ遊びを友だちと一緒に楽しむ中、保育者の仲立ちによる意味付けによって、子供たちは役割意識を持ち始める。また、言葉のやりとりによって、語彙や表現力が身に付いていくことを視野に入れ、保育者もやりとりを共に楽しむことが大切である。

先生方へ…



歩行や走ることが安定し、両手を使って遊ぶことが十分楽しめるようになるこの時期、身近な大人や友だちの様子をまねて遊ぶようになってきます。家族や保育者との安定した関わりがあればこそ、子供はその人と同じように振る舞うことを楽しむようになります。この時期の「見立て」、「つもり」遊びは、家族ごっこによく表れてきます。

しかし、ごっこの気分はあっても、自分一人でそれらしく振る舞って楽しむには難しい時期でもあります。事例にあるように、スカートをはくだけでお母さんになったり、帽子をかぶるだけでお父さんになったりしながらごっこ気分は高まり、言葉遣いや振る舞いまで変わり、楽しい遊びへ発展していきます。この時、机やイス、棚などを置いておくことが、さらに子供の発想を引き出します。

保育者が共にごっこ遊びを楽しむことはとても大切で、個々の見立てやつもり遊びにもつながりますが、集団での遊びにも広がっていきます。この楽しい経験が、3歳以降、友だちとごっこ遊びを楽しむ力の土台となっていきます。

プール楽しいね

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかわる力

【活動の様子】

園庭に大小プールが設置されると、子供たちは家庭で水着の準備をしてもらったことなどを口々に話し、楽しみにしている。ワクワク感いっぱいの子供たちの中に、浮かない表情のA児（3歳0か月）がいる。保育者がさりげなくそばに寄り添うと、「プールいや」と小さな声でつぶやく。A児の両手を握り優しく目を見つめながら、「プールいやなんだね」と言うと、A児は「いや」と言い、ほっと安心した表情になる。

プール遊びが楽しくなるように、参観日に親子で「ペットボトルシャワー」を作ることにする。参観日当日、家庭から持ってきた500ミリリットルのペットボトルにお父さんが穴を開け、一緒に周りに好きな色のシールを貼っていく。完成したシャワーを手取るA児は、お父さんと一緒に作ったことが嬉しくて、宝物のように抱きかかえている。

プール開き当日。A児は、早く手作りおもちゃで遊びたいと待ちきれない様子である。A児は保育者と手をつなぎ、足元からシャワーをゆっくりかけて徐々に水に体を慣らしながら、ゆっくりとプールに足を入れる。友だちと一緒に水の中で正座になり、ジョウロから手作りシャワーに水を入れる。シャワーを持ち上げると、四方の穴から水が落ち「ワー」と歓声があがる。A児は「すごいね」、「シャワ、シャワ〜」と興奮気味である。



それから毎日、プールで「ぼくのシャワー」で遊んでいる。少しずつワニ歩きやお顔ブルブルも自らやってみようとするので、水遊びを抵抗なく楽しめるようになる。

A児は、幼児クラスの大きいプールで年長児がダイナミックにバタ足をしながら歓声を上げている様子をじっと見ている。最初は両足ジャブジャブで足踏みをしていたA児だったが、年長児のまねをして、だんだん足を大きく動かしながら、友だちと一緒にバタ足でバシャバシャと水しぶきをあげ、楽しむようになる。

【遊びの中で育まれている力】

- ・設営されたプールを見て、いよいよプール遊びが近付いたことを感じ、A児は、水に対する怖さを感じる。
- ・保育者に思いを分かってもらったと安心する。



身近なペットボトルを使い、親子で一緒に手作りのシャワーをすることで、A児にも、水遊びを楽しんでほしい。

- ・大好きなお父さんと一緒に作ることをとても楽しんでいる。

お父さんと一緒に作った手作りシャワーをととても大切に思っている。水遊びが、少しでも楽しみになってほしい。

- ・少しずつ水に慣れていくことで、水に対する抵抗感が和らいでいる。
- ・水が流れ落ちる様子を見ながら、嬉しい気持ちがさらに高まる。

水を怖がらずに、少しずつ遊びを楽しむことができるようになっていく。

- ・少しずつ水で遊ぶことができるようになった喜びが、さらに意欲をかきたてる。【やりぬく力】

大きいプールのお兄さん、お姉さんたちのプール遊びの様子に興味・関心を持ち、憧れの気持ちを抱いているので、見守ることにする。

- ・友だちと一緒に年長児のまねをしてバタ足をすることを楽しむ。【うごく力】
- ・友だちと一緒に水で遊ぶ楽しさを共有する。【人とかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【子供の自らやりたいという気持ちを引き出す保育者の援助】

まず、安心できる保育者と共に、日常的な入浴の様子をイメージし、すくったり、流したり、移し替えたりしながら、水を使って遊ぶことを十分に楽しむことから始めた。保育者が、友だちと一緒に遊ぶ過程に丁寧に寄り添い、水遊びへとつなげていった自然な誘いによって、A児は少しずつ水への抵抗を克服し、出来るようになった喜びを味わうことができた。

【身近な環境構成】

水遊びにおいては、子供一人一人の性格や経験の差が明確に表れてくる。その中で、この夏ならではの遊びを楽しませていきたい。まず、安全面に十分配慮し、個々の興味、関心に応じた環境構成を行った。また、身近な素材を使った家族との共同製作の喜びが、水遊びへの興味・関心の高まりにつながった。

【やってみたい気持ちが育まれる異年齢の子供への憧れ】

このクラスの子供たちにとって、年長児クラスのお兄さん、お姉さんは、憧れの存在である。まねしてみたい気持ちから自らの意欲がわき、同じようにできるようになった喜びを感じる事が、さらなる意欲につながっていった。

先生方へ…



積み木を積む、プリンのカップに砂を入れる、水をすくってはバケツに溜めるなど、ものとの深い関わりから子供の興味や関心が広がり、「不思議だな、どうしてだろう？」という探究心が芽生えてきます。この探究心・好奇心が、遊びの繰り返しという子供の主体的な姿として表れ、その楽しい繰り返しの中で、水や砂などの素材の性質を知ったり、その年齢なりの遊びの工夫が出てきたりします。

この事例では、これまでも様々な水遊びを楽しんできてはいるのですが、プール遊びとなると抵抗感を抱く子供がいました。そこで、お父さんとのシャワー作りを取り入れてみたことが、子供の興味・関心を惹きつけるきっかけとなりました。身近な大人や年長児の活動に興味を持ち、「面白そう！まね真似してやってみよう」と思う子供のワクワク感が、ものとの関わりのおかげとなり、この季節ならではの体験を楽しむことへつながっていったのです。

水遊びでは、十分な安全への配慮が必要なことはもちろんですが、子供が感じている遊びの面白さや気付きに共感する保育者の援助がとても大切となってきます。その中で、「友だちと一緒に楽しい！」という気持ちを存分に味わうことが、この後の協同性の根っこを育てていきます。

事例 18

3歳0か月
(2歳クラス)

虹が 出とるよ

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかかわる力

【活動の様子】

6月のある日の夕方、先ほどまでの晴れ間が嘘のように空一面厚い灰色雲に覆われ、辺りが急に暗くなり、ポツポツと園庭に雨粒が落ち始める。次第に園庭は水浸しになり、まるで川のように水が流れ始める。当たり一面、もやがかかったように白くかすみ、雨と土の匂いが漂ってくる。子供たちは口々に、「雨が土をたたいている」、「何か泥んこの匂いがするね」と、保育者の顔を驚きの表情で見ている。保育者も、「ほんとじゃね。大雨になったね。泥んこの匂いじゃね」と、突然の大雨に驚き、雨の降りしきる様子に目を奪われている。

滝のようにたたきつける白い雨を見ながら、子供たちも、「すごいね。大雨じゃね」、「川みたいじゃね」、「遠くが見えんね」と、言っている。目を凝らして空を見上げたり、地面を水が流れる様子を一心に見つめたりしながら、しぶきが舞い降りてくる廊下にたたずんでいる。

1時間もすると、通り雨は急ぎ足で遠のいていく。お迎えに来たお母さんと帰ろうとしていたA児（3歳0か月）が、みんながいる保育室の方に向かって振り返り、「虹だ、虹が出とるよ」と、大声でみんなに知らせに戻ってくる。その声に、保育室にいた子供たちみんなが廊下に出て、くっきりと色鮮やかな美しい虹を見ることができ、みんなの歓声が上がる。

A児の「あ～ここが動物園だったらいいのに」の言葉に、「どうして？」と問いかけると、「だってキリンさんの首に乗ったら、虹に届くかもしれない」とB児。「キリンさんなら、首が長いけんね」とC児。さらに、カラスが飛んでいく様子を見ながら、「カラスはええね。飛べるけん虹に届くよ」、「羽があったら飛べるのにね」などと言っている。保育者が、「ほんとだね。虹に届いたら何したい？」と言うと、「触ってみたい！上に乗ってみたい！、滑ってみたい！」と思いつきに話している。

このようなやりとりを楽しみながら、虹が薄くなるのを、みんなで見つめている。

【遊びの中で育まれている力】

- ・激しい雨の様子に驚き、心を奪われている。

大雨の降りしきる様子や、自然事象に驚きながら、外を見ている様子を見守ろう。

- ・子供たちは、みんなで降りしきる雨を見ながら、諸感覚で雨や土の匂いを実感している。【感じる・気付く力】

自分なりの言葉で表現することを大切にしたい。

- ・いつも自分たちが遊ぶ園庭の中を、雨水が川のように流れている。その様子から、雨がもたらす変化に気付く。【感じる・気付く力】
- ・A児は、虹を見つけて感動し、思わずみんなに知らせたい気持ちから、大声でみんなに知らせる。
- ・「虹」という言葉に子供たちも保育者もすぐに反応し、みんな虹の美しさに心動かされる。【感じる・気付く力】



- ・「どうやったら虹に届くか」について、知っていることをもとに想像力を膨らませ、考える。【考える力】

子供の気持ちに寄り添いながら、イメージを共有し、楽しい世界を膨らませていけるようにしたい。

- ・友だちとイメージを共有し、言葉のやりとりをする中で、想像の世界を楽しむ。【人とかかわる力】

この遊びの中での学びを支えたもの

【思いがけず出会った自然事象】

大雨が降った後にできた、色鮮やかなきれいな虹を見て感動し、その中で豊かな感性が培われている。保育者が子供の気持ちに寄り添い、気持ちを汲み取り共感しながら、感じる・気付く力を大切に育てていきたい。

【友だちとの感動の共有】

虹を見た感動を、自分だけではなく友だちにも教えてあげたいという気持ちが芽生え、友だちと感動を共有することで、想像力が膨らみ、新たなことに気付いていった。

【感動から膨らむ想像力】

きれいな虹を見た感動から、さらに想像力を膨らませ、虹まで行ってみたい心境を素直に表現している。この想像力は、日常的な語り聞かせの中で育ってくる。

先生方へ…



幼児期において、自然事象（雲の様子、天気雨、大風、雷など）の持つ意味は大きく、自然の雄大さ、美しさ、不思議さなどに実際に出合うことで、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われていきます。

事例では、不安を伴う大雨から打って変わって出現した色鮮やかな虹を目にすることで、生まれてくるワクワクした気持ちを、保育者が大切に受け止めています。

子供たちは、これまでの自分の経験とつなげながら思いを言葉にすることで、イメージを共有し、友だちの気持ちに気付いたり、感じたりしながら、さらに想像力を膨らませていきます。こういった中で、共感性が育まれていきます。

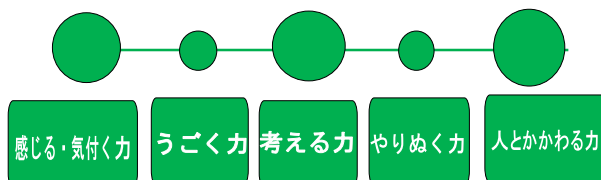
保育者自らが感性を豊かに保ち、思いがけず出会った自然現象を見逃さず、子供がちょっとした時に示すささやかな自然への関わりにも共鳴し、言葉を受け止めながら、身の周りの事象や自然とその変化の素晴らしさに共感していくことが大切です。

子供がよく見る、よく感じる、表現する、触れてみて考える活動を大切にしたいものです。

事例 19

3歳5か月 (2歳クラス)

鳴子作ったよ！ 踊ったよ！



【活動の様子】

お遊戯会の記録DVDをみていた時、年長児が鳴子を持って踊る演目が流れる。

A児（3歳5ヶ月）は、「お姉ちゃんだ！」と、年長組に在籍している姉を画面に見付けて、その踊りを食い入るようにみている。踊りが終わると、「もう1回みせて！」とねだる。他の子供の了解を得て、2回、3回と真面目な顔で繰り返しみていたA児は、「あ！」と何かを思い付いたように言った後、おもちゃを片付けている場所に走っていく。

おもちゃの中から、迷いなく洗濯ばさみ状のクリップのおもちゃが入っているカゴを取り出したA児は、夢中でクリップを組み合わせ始める。

「何を作るの？」と聞くと、保育者の方をチラッと見て、「お姉ちゃんと一緒に作るんだ！」と答え、すぐにクリップの組み合わせの続きに取りかかる。

しばらくたった後、A児が「でーきたっ！」と嬉しそうな顔で保育者を見る。A児が作ったものを見て、「わあ、お姉ちゃんの踊りの鳴子を作ったんだ！上手にできたね」というと、A児は満足そうに微笑む。

それからすぐに2個目の鳴子を作り終え、「お姉ちゃんと一緒に踊るんだ」と、自作の鳴子を両手に持って楽しそうに踊り始める。

A児の様子を見ていたB児は、「私も踊る！」と、同じようにクリップを組み合わせた手作り鳴子を両手に持ち、A児と一緒に踊る。



【遊びの中で育まれている力】

- ・繰り返し、記録DVDをみながら、年長児に憧れを持つ。【人とかかわる力】

繰り返しみることで、新しい気付きを引き出そうとしている。A児を見守ろう。

おもちゃは、子供が自分で選んで出せるような環境しておく。

- ・おもちゃで手作り鳴子を作ることができることに気付く。【感じる・気付く力】
- ・おもちゃを組み合わせて、イメージする鳴子に近付けようとする。【考える力】

これまでの流れから、A児の作りたいものは想像できた。質問することで、A児が思いを言葉にして伝え、作りたい気持ちを明確にできるようにする。

- ・自分のイメージする鳴子を作ることができたことに、喜びを感じる。【感じる・気付く力】

A児が作ったものを具体的に言語化して伝えることで、A児の達成感に保育者が共感していることを伝える。

- ・B児は、A児の楽しそうな姿を見て、自分もやってみたいと憧れを持つ【人とかかわる力】
- ・記録DVDをみながら、踊りを再現する。



この遊びの中での学びを支えたもの

【年長児や友だちへの憧れの気持ち】

「お姉ちゃんみたいにかっこよく踊りたい！」というA児の憧れの気持ちが、身近にあるおもちゃを使った手作り鳴子の着想につながった。

またA児の踊りが、「A児のように踊りたい！」というB児の憧れになり、遊びが伝播していった。

【経験したことを何度も繰り返しみることでできる環境】

お遊戯会のDVDを繰り返しみることで、A児の想像力・創造力は深まっていった。

【自由に使うことができ、自由に見立てることのできる遊具】

思い付いた時にすぐにおもちゃを使うことができる環境と、試行錯誤しながら組み合わせることができ、自分のイメージに近付けられる可逆性のある自由度の高い遊具が、A児のイメージの深化につながっていった。

先生方へ…



子供たちは、絵本で見た乗りものを散歩の中で見付けるなど、生活や遊びの中で得た情報と実際のものが一致することに喜びを感じます。その喜びに保育者が共感することで、そのものへの認識や人に伝えたい感情が拡大していきます。

この事例では、お遊戯会の記録DVDをみることに興味を持ち、さらにその中に身近な人の存在を見つけたことで、A児に興味や憧れの気持ちが生まれています。そのことが、自分も同じように「〇〇してみたい」という願いにつながったと考えます。

映像の中から何かに気付き、その気付きを行動に移したA児には、「クリップを使えば同じような鳴子ができる」という見通す力や、想像する力が育っています。手指も左右別々の動き（手の機能分化）ができるようになり始める時期です。イメージしたものがすぐに形として表現できる材料が、遊びの環境として用意されていたことは、大切な援助の一つです。また、少し大きい人への憧れの気持ち、同年齢の友だちのしている遊びへの興味・関心など、人との関わりから遊びが引き出された事例であるといえます。

